

♡ 現代魔物娘研究録# 4

著：雑兵  
画：些細



死にかげさん

*Dying in Love*

R-18  
for adults



死にかげさん

*Dying in Love*

---

生きるって何だろう。

生きているってどういう事だろう。

電車の吊革にぶら下がり、満員の人込みに揉まれながら望月健（もちづき たける）は考える。

仕事場と自宅を行き来する日々の中で考える。

仕事か、仕事だよな、そうだよな。

今までの人生の経験はそう答えを出している。日本の、いや、世界の構造は「人は働く為に生きている」と暗に示している。

人々が日々働く事によって社会は回っている、よって、働かない者を社会はとことん認めない。

幸い自分の入った会社はいわゆるブラック的な所ではなく、過酷な残業もなければ過剰なパワハラもない。

ネットや噂に聞く壮絶な体験から比較すると、望月は比較的無理なく社会の歯車に収まっている。

だから現状に不満を抱くのは贅沢というものだろう。

そうはずだ。

電車から吐き出され、改札口に吸い込まれながら望月は考える。

だけど

だけど

なんだかなあ

わかっている。

この奇妙な虚無感の原因は、自分が仕事以外に何もないからだ。

平たく言うと望月は無趣味だった。

学生の頃から真面目で成績は良かった、しかし勉強が好まなかった訳ではない、周囲の大人の言う通りにしていただけだ。

何事にも夢中になれない望月はむしろ色々な物に熱を上げる周囲の人間を羨ましくすら思っていた。

スポーツでもゲームでも漫画でもアイドルでも恋愛でも、何だっもいい、自分もあんな風に何か毎日の楽しみになる物があれば……。

そう思いながら学生を卒業し、就職し。

未だ、望月は空虚な気持ちを抱えたままだった。やる事が勉強から仕事に変わっただけだった。

これが悪い事かと言えばそんな事はない、人に迷惑を掛ける事なく自分はそつなく毎日をこなしている。

だが、こうして生き続けて、年を取って、おじいちゃんになつて……。

やがて命を終える時に何も悔いがないと言えるだろうか。

無論、悔いが残らない人生なんてものはあり得ないという事はわかっている。

だが、悔いがあるなりに精一杯生きた、と考えられるだろうか。

考えられないと思う。

何か、もつと、こう……。

言葉に出来ない。

出来ないままに月日を過ごしている。

結局、そうして生きて、死んで行くんだろう、人生なんてそんなもんなんだろう。

望月はいつもの結論に落ち着き、今日も会社の門をくぐって働く。

だが、転機というものは思いもよらない所から訪れるものだ。

会社と自宅にしかないような人間にでも訪れるものなのだ。

望月の場合、それはパソコンの画面に表示された一つのサムネイルだった。

その日、望月はいつものように仕事から帰ってコンビニの弁当を食べ終え、パソコンを立ち上げた。

動画鑑賞。

趣味として挙げるのも憚られる、近頃は誰でもしている事。

望月も動画を見るくらいはしていた。

もつとも誰か好きな投稿者がいるというわけでもなく、ニュースを適当に流し見したりする程度だったが。

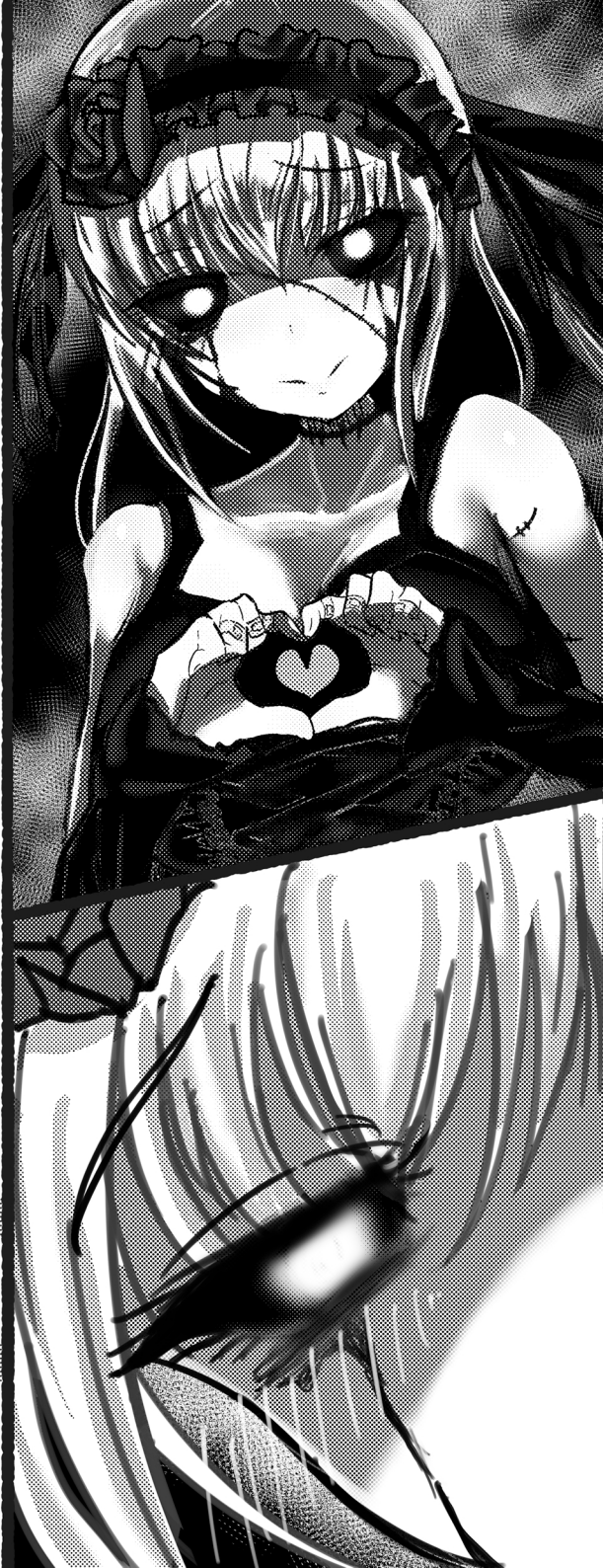
その動画サイトのトップページ。

「急上昇」の欄にそのサムネイルはあった。

映っているのはいわゆるゴスロリの衣装に身を包んだ少女。

小首を傾げてカメラに向けて手でハートマークを作っている。

それだけならただの可愛い画像なのだが、その顔を見て望月はぎよつとした。



目が真っ黒だった。  
眼球がそっくり無くてぼっかりと暗い空洞が空いているように見えたのだ。

その空洞の目の中にぼんやりと鬼火のように光が浮かんでいる。

改めてよく見ると白目の部分が黒く、瞳孔が白い……いわゆる「白黒反転」になっている目なのだとわかった。恐らくカラーコンタクトか何かなのだろうが、瞳が大きいのので非常にインパクトがある。

それだけではない。

(……これ、特殊メイク……だよな?)

顔を斜めに走る傷跡に、右目の下には肌の爛れているような箇所まである。

極めつけは喉元をばつくりと横断する傷跡。

普通に考えたとそんな怪我を負ったら致命傷なのでメイクに違いないはず、だ。

そしてそれだけの傷なのに、それが顔立ちを損ねるどころか妖しい魅力を引き立てているようですらある。

動画名は「ゾンビが〇〇歌ってみた」と、近頃流行りのアニメソングの「歌ってみた」動画である事がわかる。

投稿者名は「アンデッド野郎」とある。

(……え?野郎?女装……なのか?)

野郎というからには男なのかと思つたが、サムネイルだけでは判別がつかない。

結構な再生数にコメントも多い。

(そんなに歌うまいのかな…)

歌が気になったのもあつたが、主にこれが女装なのかどうなのかという興味に引かれて望月は何気なくそれをクリックした。

後々の事を考えると、このたつた一クリック。

これが望月の人生の分岐点になつたと言える。

少しのロードの後、画面が映る。

(おー……)

映し出されたのは衣装に合わせたのかゴシック調の部屋、そしてその中央に佇むサムネイルのゴスロリ少女。

……動画で見ても目立つのはやはりその真っ黒な目にぼんやりと浮かぶ白い瞳孔。

明るい室内であつてもまるで暗闇から覗いているかのような目。

露出は少ないが、覗く肌は白い、いや、青白い。

色白と言うよりは生気が無いと表現するべきか、多分メイクだろうが、そうでないとしたらとても血が通つているように見えない。

漆黒の衣装がその白さをより際立たせている。

(似合つてんじゃん)

ゴスロリという衣装はインパクトが強い分、着こなしが難しい。

着ている人間が衣装に負けてしまいやすい。

しかしこの「アンデッド野郎」さんはその幽鬼のような異様な風体が衣装とよくマッチしている。

何より顔立ちがちょっと見ないくらいに整っている。やはり美人は得だ。

「……」

前奏が始まる。

が、少女は微動だにしない、いや、よく見ると僅かに左右にゆらゆら揺れている。

すごく小さな動きだ。

「んん……?」

曲が始まって思わずヘッドホンを耳に押し付ける。

「声ちつさ」

か細い声が伴奏に紛れて聞こえる。

よく聞かないと聞こえない。だが不真面目に歌っている訳ではない。

少女は胸に手を当て、喉を震わせている。

懸命に、糸を紡ぐように、命を振り絞るように……。

歌が終わった。

正直言つてうまいとは言い難い。

声質は綺麗だが、何より声量が足りない。

だがそれがかえって切実さというか、切ない情緒を醸し出しているような気がする。

歌を終えた少女(?)は緩慢な動作で胸の前に指を組み合わせ、ハートマークを作る。

そうしてカメラに向けてそのウイスピのようにぼんやり輝く瞳で、上目遣いに見上げるように微笑んだ。

「うーん、それじゃあ……望月、今日頼めるか？」  
「すいません、今日はちよつと用事があつて……」  
「ん？そうか……」

望月は元々、率先して残業するタイプだった。  
家に帰つてする事もないのでから少しでも給料を増やした方が有意義だろう、という考えからだつた。  
しかし最近は違う。

特に今日は用事があるのだ。

特別な用事ではない、だが望月にとっては大事な用事

だ、今日は彼女(彼?)の生放送がある日なのだ。

動画を見るために急いで家に帰る、人が聞いたら笑うだろう。

しかし今日は「アンデッド野郎」さんの初めての生放送、しかもゲーム実況してくれるのだという。

初めてその動画を見た日からそのか細く儂く切ない歌声……ファンの間で「死にかけの蝉みたいな美声」と呼ばれる声。

そして本人が自称するようにとても生きているとは思えないそのゾンビじみた生気のない美貌に魅せられた望月にとって、これは見逃せない放送だつた。

それに生放送にコメントをすればひよつとするとコメントを拾ってもらえるかもしれない！

そんな風に熱弁を振るってもやっぱり笑われるだけだろうが、笑われたっていいのだ、好きなんだから。

通常通りに帰れば放送時間には余裕がある。

しかし帰りの電車内でも望月はしよっちゅう「アンデッド野郎」さんのページを気に掛けた。

何かのトラブルで中止にならないか、もしくは開始が早まったりしないか、繰り返し確認し続けた。

そうして、帰りのコンビニで弁当にポテトチップにコーラを買って家に到着。

風呂に入り、弁当を掻っ込み、明日の仕事の準備を済ませるとパソコンの前に待機した。

(よし、準備は万端だぞ生まれ生まれ)

コーラとチップを開け、まだ開始前の「しばらくお待ちください」と表示されている画面の前でそわそわする。

ゴソツ、ポンポン

と、映し出されたのは斜めに傾いた青白い顔のアップ：

…その後ろにいつものゴシック調の部屋。

そしてマイクが何かに当たって聞こえるノイズ。

どうやらカメラの傾きを調整しているらしい。

(う、お、始まつ……！)

突然顔のアップから始まったので心臓が跳ねる思いだった。

と、隣のコメント欄に大量にコメントが流れ始める。

死にかけさんキター……！

キター……！

キター……！

キター……！

やっぱ顔色悪い！

死にかけさん……！

はじまったああああああああ

いつも見てます！

死にかけさんマジ死にかけ



映ってますよ死にかけさん！

ちなみに「死にかけさん」というのはファンが付けた愛称だ。

「うー……」

その死にかけさんはこそごとカメラに手を伸ばして位置の調整に苦勞している様子だ。

どうも放送が始まっているのに気付いていない。

「……っっ」

と、死にかけさんの目が大きく見開かれた。真っ黒な目に白い瞳孔が光る。

「はじ、まつ……あう……」

慌てているらしいが、慌てているとは思えないスローな動きでのたのたとカメラから距離を取り、髪を撫で付けたりしている。

「えー……どうも……アンデッド……野郎、です……いつもご視聴……ありがとうございます……」

歌の時のイメージそのままの掠れて、細くて、頼りない声。

緊張しているのか元々なのか、若干舌が回っていない。

それにしてもやっぱり顔色が悪い、青いのを通り越して白い。

「今回は……ですわ……えー……こちらのゲームで……ゾンビさんと……戯れたいと思います……」

取り出したのは誰もが知る有名なゾンビホラーゲーム。

「ゲームは……あんまりやったことは……ないんですが……頑張ります……」

まさかのゾンビがゾンビゲーw

死にかけさんが死んでしまう

歌だけやっつけばいいのに……

w k t k

頑張れー！

難しいぞそれw

色々なコメントが飛び交う。

否定的なコメントや冷やかしもあるが、こうして見るとやっぱり人気があるのだと実感する。

視聴者の期待と心配をよそに、死にかけさんはすつとコントローラーを構え、真つ暗な瞳でゲーム画面を見据える。

・

・

・

「あつ……あつ……この人、この人がわたし……？顔色、いい人です……ね……」

「ちよつと……そつちは……行きたく……ないんですけど……行かないと……ダメです……？」

「あつ……あつ……あつ……ほあつ……はつ……ゾンビさん、ゾンビさん？……お、美味しいん、ですか……？」

「わたし、わたし、美味しくないですよ、ゾンビですよ、仲間ですよ、仲間、だめ？だめ？あつ……」

「構えて……銃構えて……あれ、構えるボタン……どれ……」

「逃げて、逃げて、頑張つて、走つて、右、右、あ、あ、あ、」

・

・

・

コントローラーを握つたままぐつたりと項垂れる死にかけさん。

そうしていると本当に死んでいるようである。

一時間半掛けて死にまくりながら、最初のセーフルームにようやく辿り着いた所で体力が限界を迎えたらしい。

死んだー！

し、しん……

死にかけさんが死んでしまった……

滅茶苦茶面白かった

下手すぎ、死にすぎ

笑いすぎて腹痛い

よく頑張った！

劳いの言葉から単なる悪口まで。

様々なコメントが流れる中、より一層やつれた感じの顔を上げた

「げ……ゲームって……こんなに疲れる……んですけどね……今日は……このあたり……で……許して……下さい……お疲れ……さまでした……」

ふるふるると手を振って、放送は終わった。

（ああ……歌ってる所以外を初めて見たけど可愛いなあ……下手だけど一生懸命なところがまたいいなあ……）  
ファン特有の偏った感想を抱きつつ次にまた放送があったら必ず見よう、と決意した。

・  
・  
・

（ちよつとまずい、な……）

夜、いつもの通りパソコンで彼女の動画を楽しみながら、健は考えた。

それはコメントに残る小さな悪意。

こいつ下手なくせに何でランキング乗ってんの？

ネット上で活動する限り……いや、どこでどんな活動をしていようと、知名度が上がり始めるとこういったいわゆる「アンチ」が現れるのは自然な事だ。

むしろとうとうアンチが付く程人気が出たんだなあ、と感慨深くなるくらいだ。

死にかけさんもこういったコメントに過剰に反応するタイプでもなく、いわゆるスルースキルに優れているので

辛い炎上、と言えるほどにコメント欄が荒れた事は無い。

では何がまずいのかというと、コメント欄が荒れずとも健の心が荒れるのであった。

見かけた瞬間、ものすごい長文の反論を書き込もうとして、それが炎上の火種を投入する行為である事に気付いてエンターキーを押すのを堪える。

そんな事をここの所何度も繰り返している。

ファンであるからこそ死にかけさんを困らせる行為はしたくない、でも、ファンだからこそそんなコメントが見逃せない。

何より、例えスルースキルが高かろうと悪意あるコメントを受けて死にかけさんが何とも思わないはずがないのだ。

顔には出さずとも、少しずつ傷付いているはずなのだ。

それが、許せない。

彼女を傷付ける言葉を書いた奴を画面から引つ張り出してぶん殴りたい気持ちになる。

(……落ち着けて)

自分が彼女の何だと言うのだ、ただの一ファンだ……。

「ああ……」

画面の前で頭を抱えた。

ただの一ファンである事が悔しい、投げ銭システムを使つてかなりの額を投資しているがそれ以外でも何か、彼女の支えになりたい。

彼女に何かしてやりたい……。

彼女に、会いたい……。

「……あれっ」

物思いにふけていると、ヘッドホンから耳に流れ込む

音楽が唐突に途切れた。

見るとパソコンの画面がフリーズしている。

動画は死にかけさんが歌っている途中の姿で固まり、読み込みの機能も働いていない。

「マジかよ」

そんなに古いものではないはずだが……。

効かないマウスを動かしてカチカチクリックするが、当然動かない。

舌打ちを打って、電源のスイッチに手を伸ばそうとした

瞬間、ぱっと画面が切り替わった。

「あれっ」

画面に映るのは今まで見ていた動画サイト……には違いないのだが、どうやらそれはプロフィール画面だ。

どうしてこんな所に飛んでしまったのか……。

「ん？えっ！？」

思わず、健は画面に食い入る。

アカウント名…アンデッド野郎

「そっ……！」

自分の見ているプロフィール欄が死にかけさんのものとすぐに気付いた。

つまり、ここに表示されている氏名、住所、電話番号などは全て彼女の……。

（な、な、な、何だこれ、別のユーザーのプロフィールに飛んだ！？バグ！？個人情報じゃねえか！通報を……）

そう、頭では思っている。

しかし体は素早く机を探り、メモ用紙と筆記用具を取り出すと無我夢中でその内容を書き取り始める。

一体自分は何をしているのか、しかし今日の前にある情報が他の誰も知らない死にかけさんの個人情報だと思いと止まらなかった。

現代に魔物が秘密裏に侵略を開始してから、その技術力も大きく進歩してきた。

特にコンピューター……その中でもプログラム分野の進歩が目覚ましい。

意外な共通点として、プログラミングと魔術に似た部分がある事がある要因だろう。

プログラムを解きほぐしていくと数字の集合体になる。魔術を解きほぐしていくとシンボルの集合体になる。

記号の羅列である二つを融合させる技術を「エルゾ・ボルビリ」という一人の才能あるグレムリンが開発した。

「インターネットによる侵略」という現代人にとって脅威以外の何ものでもないその技術は、画面を介して見るものに影響を及ぼす。

コンピューターウイルスと、本物のウイルスの性質を合わせ持ったそれは目に見えない形で、密かに世界を変えていく。

その中で動画サイト等で活動する魔物娘に人気のプログラムが「アナタダケニミセテアゲル v e r 1 . 1 2」これは、自分の動画の視聴者の中から特に自分への想いの強いユーザーを探知し、そのユーザーに自分のプロフィールを公開するという、人間からすると危険極まりないプログラムである。

しかし、これを使うのは魔物娘だ。

思い余ったファンがこの情報を手に入れて、彼女達に近づいたなら……結果は推して知るべしである。

〈現代魔力研究部門主任 K・K〉

ストーカー、という人種がいる。  
一方的に想いを寄せた相手に付きまとう迷惑な存在だ。  
ただ、どこまでの行為がストーキングに該当するのだろうか？

健はスマホで検索する。

ストーカー行為とは？

1. つきまとい・待ち伏せ・押し掛け・うろつき
2. 監視していると告げる行為
3. 面会や交際の要求
4. 乱暴な言動
5. 無言電話、連続した電話、ファックス、メール、SNSでの嫌がらせ
6. 汚物などの送付
7. 名誉を傷つける行為
8. 性的羞恥心の侵害

「……………ううくん……………」

健は唸って顔を上げる。

目に入るのは人々が行きかう駅前風景。健が座っているのはその駅のベンチ。

特筆する事もない場所だが健が今まで降りたことのない駅だ。

そう、あの時メモした死にかけさんの住む街にある駅……。

あの日、死にかけさんの個人情報を用意せず手に入れてしまっただけで一週間。

健は悩んだ。

知った、知ってしまった。

彼女の居場所を……。

会いたい。

いや、会うだなんて贅沢は言わない、一目、画面越しでない生でその姿を見たい。

しかし、そんな事をするのは立派なストーカー行為になるのではないか？

もしそれで彼女を怖がらせるような事になってしまったら？

それで彼女の活動を妨げてしまったら？いやそもそも自分が訴えられたりしたら……。

何より、手元にある情報は意図せずとは言え違法な情報なのだ。

これを利用して会いに行くだけでも、もう犯罪なのでは……。

そう思うならばさっさとそのメモを捨てればいいのだ。なのに自分はこうしてここにまで来てしまった。

ならば、どこまでの行為が犯罪になるのか……。そう思っただけ、調べてみたのだ。

2〜8までは問題ない……と、思う。

別に嫌がらせをしたい訳でも交際したい訳でもないのだ。

ただ、1のつきまとい、待ち伏せ、押し掛け、うろつき……。このうろつき、というのが微妙だ。

しかし、それは同じ顔を周囲で何度も見て女性が怖くなった時に初めて成り立つ。

つまり……

「……一回、一回だけ……」

繰り返して近くをうろついたらそれは駄目だろう、しかし

一回だけならただのすれ違う大勢の中の一人だ。

一目だけ、一目見たら満足できる、それなら彼女の迷惑にもならない。

健はベンチから立ち上がって歩き始める。

死にかけさんはアパートに住んでいた、部屋の種類からして一人で暮らしている可能性が高そうだった。

ストリートビューでも確認したところ、そのアパートの丁度向かいにファミレスがある。

見る限りファミレスの窓越しに彼女の部屋のドアが確認できそうなのだ。

健はそこを指す事にした。

とてもいけない事をする時のように、心臓はどきどきと高鳴っていた。

「……っっ！」

思わず、席を立ちそうになった。

ファミレスに到着してからコーヒを注文、店員の目が痛いので軽食なんかも追加しつつ四時間。

考えてみると一日外出しない事だつてあるだろうし、そもそも今日家にいるとも限らない。

その考えに思い当つても諦めがつかなくて粘った四時間。

ついに、そのアパートの扉が開かれたのだ。

しかしあまり食いついて見ると怪しいので、あくまで外の景色をぼんやり眺める風を装ってその扉に意識に集中する。

(……へ、部屋番間違えてないよな!? あそこだよな!?)

チラ、とだいぶボロボロになったメモに目を通し、自分の監視している部屋が間違いなくそこである事を確認する。

間違いない。

そして、扉を開けて出てきたのは女の子……だと、思う。

パーカーにジーンズ姿、パーカーのサイズが大きいのかちよつとダボついている。

なおかつフードも被っているので顔も見えず、肌の露出が殆どない。

そのフードから零れる二房の長い髪が辛うじて女の子かな?と思わせる。



(ほっ……本当？本人？)

家族の誰かという線もある、だが、十中八九彼女であると思われる。

「……」

すぐに、確証を得た。

彼女が「死にかけさん」で間違いない。

彼女の動きを見たからだ。

ドアを開いた彼女はゆつくりと振り返り、ゆつくりと鍵を取り出し、ゆつくりと手元を確認するようにして鍵を掛けた。

そうしてゆつくりと、一段一段確認するように階段を下り始めた。

その動き。

まさしく、動画の中で見るあのぎこちない動きそのものだ。

健の胸に複雑な思いが渦巻く。

彼女がまさしく本人だ、という興奮と。

とある噂の確証を得たショックとが入り混じった。

その噂とは。

「死にかけさんは病気なのではないか？」という噂だった。

無論、彼女は「ゾンビ」というキャラで売っている。

よってそのたどたどしい喋りも挙動もキャラ作りの一環とも考えられた。

フアンの間でも時折議論になり、本人にも確認しようとするコメントもあった。

それに関しての彼女の返答は常に「ノーコメント」。

だが、カメラの前でもない今でもあの動きという事は、やはり何かを患っているという事なのだろう。

「筋ジストロフィー症」

その噂の中で上げられた病名が頭をよぎる。

遺伝性疾患であり、根本的な治療法が確立されていない難病。

筋力の低下が主な症状だという。

素人目での判断だが、確かに彼女の動きの鈍さは筋力の低さによって起こっているようにも見える。

それは信じたくない噂だった。

もしそんな難病を患っているのだとしたら、年齢と共に症状は進行していくはずだ。

程度は様々だが多くは合併症で若くして命を落とす事になるらしい。

もししくは今は歩けても、将来は車椅子に乗らなくては行けなくなるかもしれない。

あの死にかけさんが、そんな事になるだなんて想像した  
くなかった。

「……」

そんな事を考えている間に、普通の人の倍以上の時間を  
かけて階段を下りきった死にかけさんはゆっくりとした  
歩調でアパートの前から移動しようとしている。  
どうしよう。

一目見たい、という願望は満たされたはずだ。

本当ならこれで帰るべきだ。

しかし……。

健は席を立った。

もう少し、もう少しだけ見ていたい。

もう二度と近寄れないというなら、もう少し近くで見  
たい。

せめて顔を……。

とはいえ近付いて顔を覗き込む訳にもいかない、どうや  
って距離を詰めれば……？

ファミレスを出てからスマホをいじるふりをしながら立  
ち止まり、健は考える。

死にかけさんが歩いているのは道を挟んでの向こう側……  
…。

「……？」

顔をスマホに向けながら視線だけで追っていると、異変  
に気付いた。

死にかけさんのゆっくりとした歩調が乱れ、右に左にふ  
らふら蛇行しているのだ。

今にも倒れそうに見える。

(だ、大丈夫なのか……？)

と、ガードレールに手をつけて暫くの間立ち止まった、  
本当に体調が悪そうだ。

健は偽装も忘れて顔を上げ、彼女の方を注視する。  
やがて彼女はどうかガードレールから離れるとふらふ  
らと近くにあつた小さな公園に入った。

会計を済ませてファミレスを出ても死にかけさんはま  
だそれほどの距離を移動していなかった。  
日が落ちかかった夕暮れの道を、ゆっくりゆっくりと亀  
のような歩調で歩いている。

何かそこにあるベンチまでたどり着くと、ぐったりと座ってしまう。

「……」

暫くの間見ているそのベンチから立ち上がる様子はなく、彼女は俯いてじっとしている。

棒立ちでスマホを持っている自分もそろそろ怪しまれそうな頃だ。

そこで、健は思い切った行動に出た。

道の横断歩道を渡り、彼女の傍に近寄る。

「あの……大丈夫ですか？」

声を掛けた。

体裁どうのより、本当に心配になったのだ。

もしかして病気の症状で深刻な状況だったら……。

「……」

返事はない、寝ている……？

「あの、風邪ひきますよ」

恐る恐る距離を詰めながら更に声を掛ける。

「……」

やはり、返事はない。

「あの」

寝ていると思ったのだ、だから肩に手を置いて揺さぶろうとしたのだ。

が、肩に手が当たるとそのまま彼女の体はぐらりと傾いた。

ゴトン

物のように、生命感のない動きで彼女の体はベンチに横倒しになった。

フードが捲れ、内に収まっていた長い髪がベンチに広がる。

それはやはりあの死にかけさんだった。

いつものように髪を結ってはいないが間違いなかった。

肌の色は白い。

白人のような白さとは違う、血の気の無い青白さ。

目は黒。

動画の中と同じ暗闇のような眼に白い瞳が浮かんでいる。

そう、目は閉じられていない。

半目の状態でその目は虚空を見つめている。

眠っているのではない。

「……」

健は頭が真っ白になった。

死んでる？

え？

どうして……え？

どうする？

どうすれば？

110番に……いや、119番……？

どっちが警察でどっちが救急車だっけ？

ピリリリリリリ

パニックに陥っていた脳に着信音が響く。

慌てて自分のスマホを取り出して見る。

違う、自分のじゃない。

すぐにその音が彼女のパーカーのポケットから鳴っている事に気付いた。

健は何も考えずにそこからスマホを取り出し、その着信

に出ていた。

「もっ……もしもしっ」

(……どなたですか?)

「あのっ……っ！」

聞こえて来た女性の言葉に詰まる、そこで初めて出たら  
まずかったか、という考えがよぎった。

「と、と、通りすがりのもの、です、あの、あのその、あの」

あ

(はい?)

「し、死んでしまいます! 助けて下さい!」

ぼたぼたと何かが零れた。

涙だ、気付かないうちに、健の両眼からは涙が溢れ出ていた。

(……彼女が倒れたのを、通りがかった貴方が見つけて

電話に出た、という事ですか?)

唐突に「死んでしまいます助けて下さい」と言われただけ

でここまで推察できるといのはすごい。

「……っ……あっ……あっ……はい!」

かくかくかくかくと何度も頷いてから、それが相手からは見えないと気付いて声に出して返事をする。

(わかりました、救急車を呼びます、場所は?)

「ぼっ……ぼしょ……場所はええと、ええと」

(近くに公園がありますか?)

「公園! はい、公園です、公園で倒れてました」

(わかりました、大丈夫です、すぐに救急車が行きます)

す

「あっ、あのっ! あのっ!」

(はい?)



「お、俺に出来る事は……！何か、応急処置、とか、あの、いやすいません救急車お願いします！」  
今、彼女の傍に居るのは自分だ。

何か出来る事はないかと聞こうとしてそれを自分に説明している暇があったら一刻も早く救急車を呼んでもらった方がいい、と思い直した。

(応急処置、お願いできますか？)

「え！あ、はい！」

だが、電話の相手は何かして欲しいらしい。

(その前に、失礼ですが本当に通りすがりの方ですか？)

ぎゅん、と胃が縮むような心地がした。  
疑われているのだろうか？

番号を知っているという事はこの相手は死にかけさんの友人かもしれない、友人ならば彼女の活動の事を知っているもおかしくない。

彼女につきまとう人間がいる事を警戒しているのかも……。

いや、もういい、ストーカーならストーカーでいい、今は一刻も早く彼女を助けなくては。

「彼女のファンです！俺は！彼女の……すいませっ……！！おねがっ……！！」

後半、声が詰まった。

嗚咽が喉に絡んで言葉が出なくなつた。

早く、早く、死んでしまおう、助けて、この人を助けて。

この人が死んでしまったら。

(わかりました十分です、まず、彼女を抱き締めてください)  
抱き締める？

聞いた事のない応急処置だ。

人工呼吸とか心臓マッサージとかではないのか。

(体温を上げるためです、とにかく強く密着して下さい、救急車が到着するまでです、お願いします)

そう言って、通信は切れてしまった。

抱き着け、と言われたならもうそうするしかなかった。

健は横になつてゐる死にかけさんを抱き上げて身を起させる。

重たい。

ただの物体と化した人間の体はこんなに重いのだと初めて知った。

自分に寄りかからせる体勢にしてから強く抱き締めた。

(冷たい！)

人の体温とは思えない。

健はごしごしと必死に彼女の背中を手で擦り始める。

それに合わせてかくかくと死にかけさんの座つていない首が揺れる。

「死にかけさん……！！」

耳元で呼びかける。

呼びかけておいてからその呼び方はどうなんだろうと思つたが、そうとしか呼べない。

「死にかけさん、死なないで」

涙声で呼びかけ続ける。

文面だけ見ると冗談みたいだが、必死だ。

「……う、う、う、う……」

動いた。

喉から僅かな呻き声が漏れているのも聞こえる。

「死にかけさん……！！」

「……」

ゆつくりと、そのぼんやりと光るような目が動き、健の方を見た。

「頑張つて、頑張つて、死なないで、死なないで下さい」

「……」

臉がゆつくりと動いて、瞬きをする。

「死んだら駄目です、死んだら俺は生きていけない、頑張つて、お願いします」

自分が何を口走っているのかもよくわからない。

ただ、彼女の意識を繋ぎ止めようと、必死に呼び掛け続けた。ごしごしと背中を擦り続けた。

そんな健を、死にかけさんの白い瞳は見つめ続ける。

実際にはほんの数分、だが健にとっては果てしなく長い時間の後、救急車のサイレンがようやく耳に届いた。

（まだ……冷たい）  
死にかけさんの手は小さくて、華奢だった。  
女の子の手だ。

最初は気付かなかったが、その指には所々に絆創膏が巻かれていた。

料理か何かだろうか。

何故かその絆創膏の感触でまた涙が溢れてしまう。

「大丈夫、大丈夫ですからね」

担架の傍で死にかけさんの腕に点滴を固定している救急隊員が声をかける。

そう、健も付き添いで救急車に乗り込む事になったのだ。

本当は立ち去った方がいいのはわかっている。

素性を聞かれたらボロが出ないとは限らない。

何より先程の電話の友人には通りすがりではなくファンだ、と伝えてしまっている。

顔見知りならともかく、ファンがたまたま通りすぎる訳もなく、健はかなり怪しいといえるだろう。  
だが、離れられなかった。

このまま彼女のそばを離れて、まともに日常に戻れるとは思えなかった。

「あの、そのつ……大丈夫、なんででしょうか、本当に……」

「大丈夫です」

はつきりと、その救急隊員は答えた。

混乱しすぎて気付かなかったが、女性隊員だった。

その言葉を聞いても、健はとても安心できなかった。

死にかけさんは依然意識がはつきりとしないうだし、体温もずっと冷たいままだ。

付き添いの人間にはどんな状態でも「大丈夫」と答えるマニュアルでもあるのかもしれない。

「お名前は？」

「えっ」

「貴方のお名前です」

「え、あ、望月健」

「年齢は？」

「に、22……」

「彼女とはお知り合いですか？」

「いえっ……いえ、その」  
たちまち冷や汗が浮かぶ。

「あの、わからないと困りますか……？」

「大方は連絡を下さったご友人から聞いております、ですがもしも家族の方であれば」

「か、家族ではないです……その……通りすがりです」  
流石にファンです、とは言えなかった。

「もうすぐ着きますから安心して下さい」

と、運転席から声がかかった。  
おや、と思った。

運転手も女性隊員のようなのだ。

そんな事あるのだろうか……いや、救急車に乗った事が初めてな健には何もわからないが。

運び出される担架と共に救急車を降りながら、健は辿り着いた病院を見上げる。

死にかけさんの状態を注視していたため、車外の景色に意識が向いていなかった。

元々普段は行かない駅からなので尚更場所がわからない。

街から少し離れた場所にあるらしく、周囲がちよっとした森になっているその病院はかなり大きいようだ。

それにしても……。  
（皆、落ち着きすぎじゃ……）

素人目にも死にかけさんの容体は相当危険に見える。

肌色は紙のように白く、意思の疎通が図れず、体温は生きていたとは思えないほど低い。

呼吸すらしていないように見える。  
担架に横になっていてもその胸が呼吸のために上下する様子が伺えないのだ。

そんな状態なのだから、もっと心肺蘇生とか何か処置をするものじゃないのか。

だのに担架を運ぶ女性救急隊員は点滴を投与したのみで、後は急ぐ様子もなく淡々と担架を運んでいる。

（どこまで来たんだ……？どこの病院だ……？）

「こちらで待っていて下さい」



そう言われたのが、ドラマ等でよく見る集中治療室の前……ではなく、通常の病棟の待合室。

「あ、はい……」

離れたくはなかったのだが、そう言われたなら従う以外ない。

「えっ」

名残惜しげに担架の傍を離れようとして、ぎよっとした。

「……」

ほの暗い眼差しと目があった。

死にかけさんの目が開いていたのだ。

首を横に回し、健の方をじっと見ている。

その視線に射竦められたように立ち止まる健から担架は遠ざかっていく。

遠くになっても死にかけさんのぼんやりと光る瞳はずっと、健を追っていた。

バタン

「ふうふう」

その担架が扉の奥に消えると同時に息を吐いた。

どきん、どきん、と心臓が鳴り響いている。

不思議な感覚だった。

「怖かった」のか「ときめいた」のかわからない。

その両方が混ざったような胸の高鳴りだった。

（だけど……意識はあるって事だよな？大丈夫なんだよな……？）

救急隊員からも繰り返し言われたが、どうやら命に別状はないらしい。

そう考えて気が抜けると、なんだかどっと疲れが出た。

「うわ、鼻水出てるし……」

思い返すと泣いたり取り乱したりで、だいぶみつともない有様だった気がする。

「大丈夫……大丈夫だよな……大丈夫でいてくれ……」

それでも拭い去り切れない不安を抱えながら椅子に腰かけた。

「在庫には気をつけろといっただろうに」

「……すいま……せん……」

病室で死にかけさんこと本名メリナ・ミルコアは項垂れていた。

ベッドの傍で腕組みをして立っているのは白衣に身を包んだ灰色の髪の良い少女。川淵香苗（かわぶち かなえ）

そうして見るとこの病院の医者のようなだが、彼女は医者ではない。

救急車を呼んだ後、見舞いに来てくれたメリナの友人である。

「今回は幸い私がここに連絡できたからいいものを……」

「普通の救急車」を呼ばれてたら大ごとだ」

「うう……」

メリナは縮こまるばかりだ。

「それに……もう死んでる」にしたって、倒れたと聞くと不安になるだろう？」

「すいま……せん……」

「とりあえず緊急の補精はしたので、しばらく休めば経口摂取もできるようになります」

傍に立っていたもう一人の女性看護師が言う。

そう、基本的はこの病院には患者も職員も女性ばかりで構成されている。

「グレイリア・サバト直営 黄泉坂病院」

全国に点在する魔物達が経営する病院。

その中でもアンデッド種の受け入れを専門にしている病院の一つがここ、黄泉坂病院だ。

投稿名「アンデッド野郎」

通称「死にかけさん」

本名…メリナ・ミルコア

ユーチューバーであり、異世界から現代への移住者であり……ゾンビである。

「また裁縫かい？」

死者達の中でも上級に位置する種族「リッチ」である香苗が、ゾンビとは違った滑らかな口調で問う。

「……うん……」

メリナの着る衣装は全てが自作である。

種族の特性として器用さを要する作業には不向きだが、精補給剤を多めに服用する事でメリナは裁縫をこなせるのだ。

ところが常用する分まで消費してしまっている事に気が

き、仕方なくガス欠状態で病院にまで赴こうとして行き倒れた、というのが今回の顛末だ。



「しかし怪我の功名と言うか……彼、だろう？」

「……」

メリナはもじ、と病院着の裾を握る。

「もう君の虜じゃないか、あれは」

「~~~~~」

ぎゅ、と膝を抱えて顔を埋めてしまう。

生きている人間ならば耳まで真っ赤になっているところ  
だったろう。

くす、と付き添っていた看護師が笑って言う。

「お会いしますか？」

「……うう……」

眉を寄せた困り顔を上げる。

「……でも……それは……うう……だけど……」

葛藤しているようだ。

「今を逃すと会う機会は持たないかもしれないぞ？」

焚きつけるように香苗が言う。

メリナは胸に手を当てる。

手のひらには何の鼓動も伝わって来ない。

当然だ、止まっているのだから。

心臓が止まっても、緊張はするものなのだ。

「……ん……」

こくん、と小さく頷いた。

「望月さん、患者さんの容体は安定しましたよ」

「ああ……よかつ……たあ……！」

看護師に伝えられ、健は椅子の上で天井を仰いだ。

「そのっ……後遺症とかそういうのも……」

「大丈夫です、持病の発作だそうです」

「……」

少し、暗い気持ちになる。

やはり病気なのだ、それも多分軽いものではなく……。

「お会いになりますか？」

「えっ」

「お礼が言いたいそうです」

「め、面会できる状態なんですか？……それにお礼言われる事なんて……」

何と言うか、自分はひたすら慌てていただけだ。

それにその場に居合わせたのも偶然でなく、不純な動機からだし……。

言葉に詰まる健に女性の看護師はにっこり笑いかける、冷静に見てみると美人だ。

「是非会ってあげて下さい」

「……」

健は胸に手を当てる。

どくん、どくん、と、手のひらに鼓動が伝わってくる。

先程のパニック状態の時とは違った理由の胸の高鳴り。

会いたい、会える。

こんな機会はきつと、二度と訪れない。

ガチャ

看護師が案内した先の病室の扉を開く。

「どうぞ」

健の脳裏に今まで見た動画の内容がぐるぐる回った。

頭にかあつと血が上るような感覚がする。

こんなに緊張したのはいつぶりだろう。

「お邪魔します……」

部屋に入ると彼女がいた。

ベッドの上に、病院着の死にかけさん。

動画とは違つて髪は結ばれておらず、肩に垂らされている。

フアンの前で見せた事のない姿、死にかけさんのプライ

ベート姿……病院だけだ。

また、鼓動が高くなる。

「……」

窓の外を眺めていた死にかけさんがこちらを見た。

あの、暗く輝く目で。

「どっ……あっ……どうも……」

健は会釈する、死にかけさんはゆっくり瞬きする。

看護師さんはそそくさと部屋を出て行つて、二人きりになつてしまふ。

(ど、どうしよう……何を言えは……)

と、死にかけさんが何かに気付いたように目を見開き、

ごそごそとベッドの中を探り始める。

取り出したのは髪留め。

髪を一房掴むときゅ、ぎゅ、と結わえ始める。

(あつ……)

見る間にいつも動画で見ている髪型に変わる、いつもの見慣れた死にかけさん。

「どうも……アンデッド、野郎、です……」

動画と同じようにたどたどしい口調で、そう言った。

(ああ……)

知つている、知られているのだ。

恐らく、あの友人経由で。

自分がファンである事、そしてこつそりつけ回していた事も……。

「あ、あの！いつも見てます！」

「……どうも……」

病室でファン交流会のようなやりとりをする。

「あの、すみません！」

「……」

唐突に頭を下げる健に、死にかけさんは首を傾げる。

「そのっ……！！たまたま見かけて……！！それでついついつけ回してしまつたんです！」

流石に住所を掴んで探しに来た、とまでは言えなかつた。

ふるふる、と死にかけさんは首を振る。

「お陰で……助かり、ました……」

「いえいえ！そんな……」

「……いえいえ……」

互いにぺこぺこ頭を下げあう。

「……」

「……」

ちよっと気まずい空気が流れる。

「それで……あの……」

おずおずという感じに死にかけさんが話始める。

「……その……」趣味は……？」

「えっ？」

急にお見合いみたいな事を聞かれて疑問符で頭が一杯になる。

死にかけさんは慌てた様子になる。

「あの……急にごめん……ええと……」

「あ、いや、あの……動画、鑑賞です、はい」

「あ……はい……」

「……」

「……」

互いにもじもじとする。

お互いに相手が緊張しているのが伝わる。

「あの……立ち入った事聞いていいですか？そのつ、迷惑なら答えなくても」

「……何ですか……？」

「動画でも何度が質問されて……いつもノーコメントなんですけど……」

ごく、と喉を鳴らす。

「やっぱり病気なんですよね……？」

「……」

聞くのは失礼かと思いつつ聞かざるを得なかった。

どんな病気なのか、もしかして想像した通り筋ジストロフィーなのか。

これから先活動はどうなるのか、命に係わるのか……。

「の、ノーコメントでもいいです」

「……」

ゆつくりと、死にかけさんは笑った。

全ての行動においてだが死にかけさんは動きが遅い、表情筋もそうなのだろうか。

健の心拍数が今まで以上に高くなる。

蠱惑的な表情だった。

動画の中では見せたことのない表情。

「あなたには……特別に、教えてあげる……」

「え、あ、え……？」

「こっちに……おいで……」

ぼんぼん、とベッドを叩く。

戸惑いながら健は近づく。

病院特有の薬や消毒液の臭いに混じって、ほんのりと熟れた果実のような香りがする。

(もしかして……死にかけさんの匂い……?)

不敬だとは思いながら、そんな事を思う。

「手……」

絆創膏の貼られた、白い手を差し出された。

易者が手相を見てやろうとするように。

自然にその手に自分の手を置く。

さゆ、と握られた。

か弱い力だ。

搬送されていた時の感触と変わらず、その手は死人のよ

うに冷たい。

ゆっくりと、その手が死にかけさんの元に引かれてい

く。

死にかけさんはどろりとした蠱惑的な笑顔で、健を見つ

めたままだ。

「触つ……て……みて……」

そんな事をしたら駄目だ。

本当ならそう思うべきなのだろう。

だが、健はただ口を半開きにしたまま、自分の手の行方を目で追うばかりだった。

病院着から覗く白く、ほっそりとした首元。

そこに手で折り重ねられるようにして、首を掴む形で触れた。

まるで、健の手を借りて首を絞めているかのような倒錯的な体勢。

手と同じく、その艶やかな肌も冷たい。

「感じて……」

「……」

健はただ、ぼんやりと死にかけさんの暗い瞳と手に感じる肌の感触に浸るばかりだ。

「感じない事を……感じて……」

(感じない……事を……?)

何を言われているか分からなかった、ただ、自分の心臓の音がうるさいくらいに……。

心臓の、音……?

自分自身の心臓を意識した瞬間、健は「感じない事を

感じた」

鼓動が無い。

ばくんばくんと脈打つ自分の心臓、無論、彼女に魅了されているからだ。

対して、死にかけさんの首の……脈……。

緊張していても、落ち着いていても感じるはずの血管の脈動が、感じられない。

それどころか、呼吸すらしていないように感じる。

健は医者ではないから、人の首に触れた事なんてそんなには無い。

それでも感じられる違和感だった。

そういえば、救急車の中でも呼吸をしていないように見えた……。

「私……死んでるから……」

「うまいことやったんじゃないか？最初はどこのお見合いかと思ったが」

病院の窓から教えられた駅への道を歩いて行く健の後ろ姿を見ながら香苗が言う。

「……」

それに対しての答えは無い。

メリナはベッドの上でぐったりとするばかりだ。

普通、初対面で全ての秘密を明かしてしまうのは余りにリスクが高い。

怖がられるのが普通だし、そこから厄介な事態に発展しないとも限らない。

だが健の反応を見る限り、彼がメリナの事を恐れたり誰かに触れ回ったりすることはなさそうだ。

思えば彼は出会う以前から彼女のファンであり、好感が高い。

尚且つそもそもメリナは「ゾンビ」というキャラで売っていた。

よって、この事実を受け入れる下地はある程度できていたと言える。

そして何より、彼は間違いなくあの時メリナに魅了されていた。

「親しくなっただけから言い出すタイミングが掴めなくなる、なんてよく聞く話だ」

友人の健闘を称えるようにぼんぼんとベッドを叩きながら香苗が言う。

「大きな山を越えたって事さ」

「……き……き……きんちよう……した……」



メリナがようやく言葉をひねり出す。

本当に体力を消耗しているようだ。

「がんばった、がんばった」

香苗が労う。

まだ震える手で、メリナは手に握られた一枚のメモに目を通す。

望月 健

そこに記された名前と電話番号。

じっと、その名前を見つめる。

自分の一番のファン、自分の為に泣いた人。

「タ、ケ、ル……」

口の中で転がすように呟いた。

寂れた教会を背景に、死にかけさんがか細い声を控える。

歌うだけではなく、最近はその振り付けも付けて踊るようにもなった。

とは言え勿論激しい動きが出来るわけではない。

手足をゆっくと動かすような独特な動き。

ファンの間で「スローモーションのバラバラみたい」と言われる踊り。

他の人がやったなら滑稽にしか見えないであろうその踊りも、彼女の歌声と合わさると不思議と様になる。

「おま……たせ……」

と、声が掛けられ、健はスマホの動画から顔を上げる。

駅の雑踏の中に立つのは漆黒の衣装を身に纏った漆黒の目の少女。

片手にはこれまた黒いキャリーバッグを引いている

今しがた動画の中で見ていた少女。

「あ、お疲れ様です」

頭を下げる健にゆっくと、苦笑いのような表情を浮かべる。

「……お堅い……ね……」

あの病院で連絡先を交換した二人。

健の方から「何か役に立てる事があるなら何でも言っ  
て欲しい」と伝えたあの日から、二人は何度かこうして会  
っている。

主に今回のような買い出しが目的である事が多い。

「……今回の、見てた……？どうだった……？」

と、健の手元を覗き込んで言う。

「最高でした！」

「ふふ……いつも、同じ感想……」

「最高は最高としか言えないです」

「ありがと……じゃあ……行こっか……」

「はいっ」

「あ……いいよ……」

「いえ、このくらいさせて下さい」

このやり取りもいつものパターンだ。

遠慮するメメリナの手からキャリーバッグを奪う。

「切符、買いますね？」

今回はいつもより少し遠出をする事になった。

衣装の生地を買いに行くのだが、特殊な生地を売ってい

る店があるのだという。

「蜘蛛は……苦手……？」

この遠征の前にそう聞かれた。

「蜘蛛……？いやあ、特に苦手でも得意でもないですけ  
ど……？」

「蜘蛛の人……が、店員さん……かなり……刺激が強い  
から……気を付けて……」

との事だった。

「蜘蛛の人」というのがどういう事なのかいまいち要領  
を得なかつたが、とりあえず何か大変な物を目にする事  
になるらしい。

・  
・  
・

「ええと……これと……これと……」

「これなどはどうですか？」

「うーん……こつちも……」

訪れたのはとある商店街に人間からは隠されて佇む店

「カラーパープル」

ちよつとした有名店らしい。

「ちよつと……予算的に……」



「これなどはお買い得ですよ……?」  
彼女と行動を共にするようになってから、これまでもそ  
こそこ色々な物を目にしてきた。  
今までの日常からは想像もつかなかったものまで色々……

「これなどもお似合いになるかと……」

「……いい、ね……」

しかしこれだけ現実離れた現実、これまで見たこと  
が無かった。

「そちらの方も……何かいかがですか?」

「あ……いやっ、お、俺はいいっす」

「あらそう……?」

頭上から降ってくる女性の声に、見上げながら返事をす  
る。

それだけ女性が長身なのだ。

いや、これを「長身」と称してよいかは疑問だった。

「ふふ、怖いかしら? いいんですよ怖がつて……怖がら  
れるのも嫌いじゃないもの♪」

そう言うのはこの店を一人で切り盛りする店員、巢飼  
(すがい)さん。

上半身は見目麗しい美女なのだが……そのスカートから  
延びるのは蜘蛛の多脚。

アラクネ、という蜘蛛の魔物娘なのだという。

これには流石に健もビビった。

「失礼だなんて思わなくていいのよ、怖くて当然、これ  
からも色々な娘達を目にする事になるんだから」

「……存在、としては……わたしの方が……怖いからね……」

「ははは……」

健はどうにか笑うので精一杯だった。

色々と交渉しながら、次々に購入されていく生地達は確かに今まで見たことのない質のもの達だった。

吸い付くような手触りのもの、見たことのない輝きを放つもの、角度によって色が変わるもの……。

動画でいつも見ていて綺麗だとは思っていたが、こんな拘りがあるとは知らなかった。

「このくらい……かな」

荷物がキャリーバッグの蓋が閉まるぎりぎりになって、メリナは満足しようだった。

「ありがとうございます♪」

外観とは裏腹に終始気さくな店員、巣飼さんに見送られて店を後にした。

「すごいなあ……知らない世界だらけだなあ……」

魔物達が経営する店が軒を連ねる商店街を見回しながら健は呟く。

この一画は普通の商店街に連なって出来ているが、普通の人間は立ち入れないよう結果で隔離されているらしい。

基本、訪れるには魔物娘に案内してもらわなければならない。

「今日は……遠くまで……ありがとうございます……」

「いえいえ！好きでやってるんです！」

これは本当だ。

彼女の動画作りの手伝いができるなんて、ファンとしてこれ以上のご褒美はない。

（あとちょっぴり……デート気分が味わえるし……）

これは秘密の思いだ。

いつもの流れだと、買い物で済めばこのまま帰って解散になる。

（だけど今日は遠出したから、帰り道も長いぞ……！）

少しでも一緒にいられる時間が長い、と卑しい思いを抱く健にメリナがおずおずと声をかける。

「……ええと……お時間、大丈夫……？」

「え？はい」

「……夜まで……大丈夫……？」

「えー、あー、ええっ！はいっ！全然！」

実際予定はなかったが、あったとしてもこれ以上に優先する予定など健にはなかった。

ちら、とアンティークの腕時計に目を走らせたメリナは「……こっち」と言って健を誘導した。

キャリーバッグを引きながらゆっくり、ゆっくりとした歩調でメリナの後についていく。本当にゆっくりでないとすぐに追い越してしまうのだ。色々な店を横目に通り過ぎ、辿り着いたのが一つのドアの前。

店と店の隙間にある、飾り気のない鉄のドア。

一見すると従業員用の出入り口か何かにはか見えない。ただそのドアの足元の隅にぼつんと、小さなしゃれこうべを模した置物が置いてある。

そのしゃれこうべが「OPEN」と書かれた看板を咥えている。

そのしゃれこうべだけが、その扉が何らかの店の入り口であると伝えていた。

案内されなければ間違いない見過ごされる入口だ。

メリナがその扉を開けるとすぐに地下へ続く狭い階段になつていた。

側面の壁には見たことのない言語で書かれた何かの広告が乱雑に貼られている。

「まあまあお客さん、大荷物」

キャリーバッグを二人で持ち上げてよいしょよいしょと階段を下りていると、下から声が掛かった。

(あつこの人、死にかけてさんと同じ……「ゾンビ」だ)

キャリーバッグ越しにそのスーツ姿の女性店員を見て、健は思った。

血の気のない顔色、くすんだ灰色の長い髪。

何より縫合の痕も生々しい、その美しい顔を横に横断する一筋の傷。

「いらつしやい、手伝いますよ」

朗らかな笑みを浮かべて店員はキャリーバッグの下側を支えた。

・  
・  
・

(バーかな、ここは……)

キャリーバッグを何とか運び込んで見回すと、カウンターと小さなテーブルで構成されたこじんまりしたバーだった。

光量を抑えられた店内は薄暗く、ライトアップされた色とりどりのボトルが輝きを放っている。

小さな音量で流れるBGMはジャズ。

「すげえ、お洒落」

「ふふ、ありがとうございます」

ゾンビの店員はにっこり笑うと二人掛けのテーブルに案内した。

腰かけると炒ったナッツ類の入ったグラスが二人の前に置かれた。

「そちらの方、魔界産はOK？」

と、店員が健の方を示してよくわからない事を聞いて来た。

「……いえ……通常で……」

メリナが答える。

「はい」

そんなやり取りの後、メニューが渡された。

一般的なランナップの酒類にカクテル、軽食類……。

と、メリナの方に渡されたメニューは自分の物とは違う事に気付く。

「これは……魔物用……」

ゆっくり微笑んでメリナが言った。

健はウイスキー、メリナがカクテルを頼んだ。

「こうして……ゆっくり……話す事も……なかったから……」

「そ、そう、ですね……」

「失礼します」

グラスがコースターと共に運ばれて来る。

琥珀色のウイスキーが健の前、妖しい紫に光る、見たことのない果実がトッピングされたカクテルがメリナの前。

「おつかれ、さま……」

「おつかれです」

チン、とグラスが合わされる。

(ああ……本当にデートみたいだ……)

•

•

•

「でまあ、大手の相手なんで、下請けなんてそんなもんなんですよ」

「ふふ……たいへん……」

「だけど後輩は……なんかすいません、愚痴ばっか聞いてもらっちゃって」

「……ううん……色々聞けて……よかった……」

「仕事は何を？」というメモリナの質問を皮切りに、酒の勢いも手伝ってちよつとした愚痴を披露してしまつた。

メモリナはただニコニコとそれを聞いてくれている。

「仕事の他には何も無いんですよ、無かつたんですよ、俺」

「うん……？」

「死にかけさんの動画のファンになって……大げさだけど、何か……生きがいを見つけたっていうか……」

言葉にするとひどく誇張して聞こえる。

だけど、そういう事なのだ。

死にかけさんの動画を見ていなかったら、もっと自分はずまらなく生きていた。

何にも生きがいを見いだせないまま生きていた。

だから、感謝しているのだ。

それをうまく言葉で言えない、どう言っても陳腐な言い回しになってしまふそうで。

「……」

メモリナは、そんな健を微笑みながら見つめている。

「そのっ……死にかけさんは……どんな経緯で動画を……？」

照れ臭さを感じた健は、話を向ける。

「……」

少しの間、メモリナが何か考えるように目を閉じた。

「ちよつとだけ……いいかな……」

そう言つてメモリナは店長を呼んで何かを注文する。

「これを……あ……健くんは……煙草の煙……大丈夫……？」

「え、あ、はい」

間もなく、メモリナの手元に高級そうなシガレットケースとオイルライターが置かれた。

「イメージ……壊れたら……ごめんね……？」

そう一つ断りを入れると、何の銘柄も入っていない一本を手取る。

健はその間にライターを手取る。

シユボツ

「ん……」

手を添えて付けられたその火にメモリナが顔を近づける。

ジジ……



ライターの明かりでメリナの青い顔が薄暗い店内に浮かび上がる。  
「ふ……」

シャクン、とライターが閉じられると同時にメリナが煙を吹く。

すぐに、普通の煙草ではないと気付いた。

鼻をつくニコチンの臭いではない、何か薄つすらと香木のような香りがする。

それに、吐き出された煙は薄紫色をしている。

「魔界産」の何かなのだろう。

「少し……少しだけ……似てる……ね……きみは……わたしに……」

懐かしむような表情で、メリナは言った。

メリナの見た目は、どう見ても成人前の少女だ。

その少女が煙草をくゆらせる様はひどく背德的で、退廃的だった。

(……幾つなんだろう……)

今まで考えた事もなかった疑問が、初めて脳裏をよぎった。

考えてみると彼女はゾンビだ、見た目通りの年齢ではないのかもしれない。

そもそも健はゾンビというものの生態(?)を詳しく聞いた訳ではない。

メリナはもう一息、煙を深く吸い込んで、吐き出した。



バーの暗い空気に、薄紫の煙が溶けて行った。

死の間際に人生を振り返る暇はあると言えはあつた。何しろ断崖なものだから、落下するまで何秒かはあつた。だが、脳裏に浮かんだのは「あれ？」ぐらいしかなかつた。

ちよつと待って、と思う間にどすん、と目の前が真っ暗になって、それでお仕舞い。

高所からの転落だったので死体はまあ、ひどい状態だったらしい。

顔面に深い傷が入り、首などは千切れかけていたという、早々に気絶出来て幸いというところだ。

では、蘇つた経緯はというと、これもまた劇的な経緯は何もない。

彼女の復活を願つた誰かが蘇らせたのでなければ、魔物に見初められて魔物にされたでもない。

住んでいた村が魔界化し、葬られていた墓場が魔力に侵食されたからだ。

墓から這い出して、はつきりとしれない頭で考えた。どうして自分はいつも「脇役」なのだろう。

どうして「その他大勢」なのだろう。蘇るといふ劇的な出来事ですら、流れでそうなつてしまつただけだ。

どうして……？

・  
・  
・  
メメリナ・ミルコアの死因は転落死。

小さな村に農家の娘として生まれた生涯は、いともあつけなく幕を下ろした。

原因は色々ある。

それは村の傍に断崖があつた事が原因かもしれない、その傍をたまたま歩いていたのが原因かもしれない。

そこに蜂の巣があつたのが原因かもしれないし、その蜂に驚いて暴走した荷物運びのロバが原因かもしれない。

最終的にはそのロバに驚いて足を踏み外した娘が間抜けだった、という話なのかもしれない。

いずれにせよ誰かの殺意による謀略でもなく、不治の病による悲劇的な死でもない。

どこでも誰にでも起こりうる、平凡な死だった。

考えた。

考えて、思った。

そうだ、そもそも自分はちゃんと「主役」であろうとしたらどうか。

それは物語の中の話ではない、他の誰かにとってでもない。

自分の人生の中でだ。

自分自身が、自分の人生は所詮時代にとって、他の誰かにとっての脇役だ、と考えてはいなかったらどうか。

変わりたい、と思った。

このままでは自分はこのゾンビだ。

どこにでもいる脇役のゾンビだ。

それは、変えようとしないうちに限り変わらない事なのだ。

一回死んでやっとなかった事だ。

唯一無二のゾンビに、自分はなるのだ。

他人にとっては脇役でもいい、自分自身が唯一だと思えるように。

そういうふうには、生きなくちゃいけない。

「……自立ちたがり屋……なんだろう、ね……元々……」

灰皿に煙草を押し付けて、メモリナは言う。

「君に何か……与えられたなら……それはとても、嬉しい……生き返った甲斐があった……」

凄い人だ。

健はそう思った。

自分と似ている、と言ったがそんな事は全然ない。

人に迷惑さえかけなければいい、と思っていた自分と。

自分を主役と思えなかった生前の彼女。

確かに似通った所があるかもしれない。

だけど恐らく自分が同じ境遇になっても、自分はただの脇役であろうとし続けただろう。

死んでも変わりはしなかっただろう。

「俺も、死にかけさんを知れてよかったです……」

言ってから、何だか告白みたいな言葉だと思つて赤面した。

二本目に火を付けたメモリナはそんな健を何とも言えない目で見ている。

その姿はいつものちよつと頼りない死にかけさんの姿ではなく、大人の女性に見えた。

「失礼します……」

灰が飛ばないようにそつと蓋を被せ、店員のゾンビさんが灰皿を交換してくれた。  
そこでふと、気になった。

「あの……」

「はい？」

店員を呼び止めてから、聞いていいものか迷った。

「その、店員さんはその……」

「矢島アレサ、と申します……今後も御贖にしていた  
だけると幸いです」

ゾンビの店員、矢島さんにはっこり笑つてそつと名刺を差し出した。

「あ、どうも……」

「何か、ご質問が……？」

「あー、その……」

失礼かと思ひながらも思い切つて聞いてみる事にした。

「矢島さんはゾンビですよね？」

「はい、そうです」

「だけど、ゾンビにしてはその……」

ちら、とメメリナの方を見る。

違うのだ。

矢島とメメリナを比べると、明らかにメメリナの方がゾンビらしい。

見た目はそう変わらない、血色が悪いところなどは死人の特徴を有している。

だが矢島は言葉も滑らかであり、動きもきびきびしている。

言葉も動きもゆつくりとしかできないメメリナとは違う。

同じゾンビなのにどうしてこうも差があるのか。

「ああ……」

疑問を察したらしい矢島は艶のある笑みを浮かべた。

「私は既婚者ですのぞ」

「え？」

既婚者？

結婚している事がどう関係するのだろうか。

いや、いやいや、それ以前に。

「け、結婚できるんですか……？」

失礼な物言いかもしれないが、思わずそう言った。

だって、ゾンビなのに、死人なのに……。

「できますとも、子供もいるんですよ？」

「そつ……」

「私がこうして支障なく仕事が出るのは夫のお陰、と言う事です」

「……だ、旦那さんがいる事でどうしてその、動きが違うんですか……？」

あら、と言つて矢島はメモリナの方を見た、メモリナはどことなく気まずそうに煙草をふかす。

「魔物娘の事についてご存じない……？」

「あ、あまり詳しくは……」

「そうですか……そうですね……魔物娘、というのは男性から精をいただいで生きております」

「精、というのは……？」

「説明が必要ですか？」

にっこり笑つて、自分の下腹部について、と指を這わせた。

(えっ……ええええええ！?)

詳しく知らなかったのは確かだ。

ただ、女性しかいないという生熊だという事ぐらいしか聞いていなかった。

「私達のようなアンデッド種であつても精を沢山いただくと、生前と変わらない動きができるのです」

矢島さんは淡々と説明するが、精を沢山貰っているなどと言われると、この矢島さんの事もまともな目で見られなくなりそうになる。

「そして、活性化した状態であれば子供を授かる事も可能……つまり生物的には他とそう変わらないという事です」

「……」

今まで、ゾンビである事に固定概念があつた。

不死であっても子供が作れる、引いては普通に結婚できるものだとは思ひもなかった。

だから、メモリナさんはあくまで向こう側の存在だった。

リアルで傍にいても、画面の向こうの手の届かない存在と同じだった。

それが……。

普通の女の子のように、結婚したり子供を作れたりする……なんて……。

思わずメモリナの方を見ると、その視線から逃げるようにふい、と顔を逸らされた。

その様は先程の大人っぽさが嘘のようで、外見に相応しいだけの恥じらう少女のようだった。